

## 王安石 隱棲の地 南京（の半山寺）

そまつな野中の一軒家が、南京城の東門から七里、また東郊の名勝 蔣山からも七里のところ、つまり、町と山との半ほどのところに、彼の号の「半山」の名におうてあり、周囲に垣根はない。垣根を作れという人があると、笑って答えない。驢馬にのり、従者数人と、近所の寺を訪ねるのが、日課であり、人のかつぐ輿は 非人道だと言ってきらったという。

神宗の後半期、年号が元豊である間、彼はそこで読書と思索と著述と、そうして詩作にふけた。周辺の風景を詠じた詩が、ことに七言絶句として多い。若いころの詩に、「願って山水の間に於いて、意願は合する所多し」というように、山水もまた彼の愛するものであった。退隠後の作のただ一二の例として、

## 誰將 宋・王安石

誰將石黛染春潮

誰か石の黛を將って春の潮を染めし

復撚黄金作柳條

復た黄金を撚りて柳の条と作せし

西崦東溝從此好

西の崦東の溝 此れ従り好ろし

筍輿追我莫辭遙

筍輿 我れを追うに遙かなるを辞する莫かれ

「筍輿」は竹製の駕籠。人間の舁くものであるが、時には彼ものつたらしい。さあこれから散歩の行程をのばす季節だ。かごやさん、御苦労だが、遠方までの出迎えを、ことわらずにくれ。

清潔な自然の中に展開するのは、彼が懸命に福祉をはかってきた農民の生活であった。

「清明」、春の節句を題している

## 清明 宋・王安石

東城酒散夕陽遲

東の城の酒は散りて夕陽遅かに

南陌秋千寂寞垂

南の陌の秋千は寂寞と垂る

人與長瓶臥芳草

人は長き瓶と与に芳草に臥し

風將急管度青陂

風は急しき管を將ないて青き陂を度る

「秋千」は鞦韆とおなじく、ぶらんこ。村の運動会はおわつたらしく、女の子の乗っていた、ぶらんこの縄がしずかに垂れるそば、草むらで徳利を抱いて寝ている奴がいる。しかし堤防の向こうでは、二次会がひらかれているらしい。

かくて秋の大豊作。年号も元の豊であるのをたたえた「元豊を歌わん」の第一首にはいう、

歌元豊五首 其一 宋・王安石

水満陂塘穀滿篝

水は陂の塘に満ち 穀は篝に満つ

漫移蔬果亦多收

漫りに蔬菓を移せしも亦た取り多し

神林處處傳簫鼓

神の林より 処々に簫鼓のねを伝え

共賽元豊第一秋

共に賽ず 元豊の第一の秋

「処処」はあちこち。彼の得意おもうべしである。

最晩年は失意であった。一〇八五、元豊八年、神宗皇帝の崩御とともに、新法党の政権はくずれ、旧法党の宰相 司馬光が、新法の政策を、一つ一つ停止する。その翌年、彼は亡くなる。

要するに王安石の詩は、その人柄の如くまたその政治の如く、潔癖に鋭敏である。鋭敏であるがゆえに、抒情的である。ただし悲哀に没入しない点は、他の宋詩と同じであり、彼の場合は、学者政治家としての潔癖が、悲哀を抑制したのであろう。若い友人であらうか、李璋の科挙試験落第を慰める七言律詩に、「文章は数しば悲哀あるを尤に忌む」という句がある。次の五言絶句二つは、それぞれにおいて鋭敏で潔癖であった彼の自画像として、読める。一つは「芳草」

芳草

宋・王安石

芳草知誰種

芳ぐわしき草よ知んぬ誰か種えし

縁階已數叢

階に縁いて已に数叢

無心與時競

時と競う心無きに

何苦綠葱葱

何を苦しんで 緑葱葱たる

「階」は庭前のテラス。「葱葱」は豊富で清潔なみどり。また「梅花」。

梅花

宋・王安石

牆角數枝梅

牆の角の数枝の梅

凌寒獨自開

寒さを凌いで独自に開く

遙知不是雪

遙かに知る是れ雪にあらざるを

爲有暗香來

暗香の来たる有る為めなり